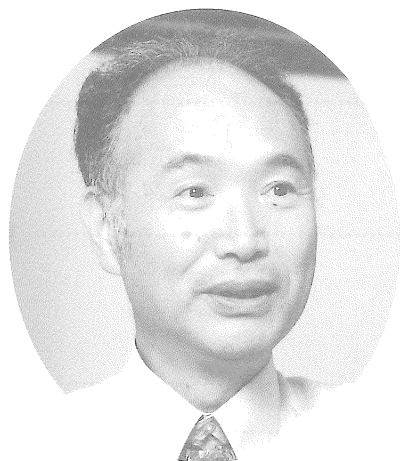


編集者より



滋賀医科大学福祉保健医学講座教授

上 島 弘 嗣

アルコール飲用が、精神的・身体的にどのような影響を与えるかは、古くから研究されている課題である。多量飲酒が健康障害をもたらすことは、周知の事実であるが、少量や中等度までの飲酒は社会的にも受け入れられ、健康に障害のない飲酒習慣とはどのようなものなのかを明らかにしていく必要がある。

特に、少量から中等度のアルコール飲用やアルコール飲料の種類が、健康にどのような影響を与えるかについては、依然、不明の点も多く、新しい知見が次々と発表されている。

そもそも、中等度のアルコール飲用量とはどの程度なのか、日本人と外国人とでは異なるのか、健康を障害しない飲酒習慣とはどのようなものなのか、さらにその薬理作用はどうか、多量飲酒や健康に障害を与えないような飲酒習慣の維持が可能なのか、等のさまざまな問題がある。

そこで、本書は、アルコールに関する疫学研究からアルコール代謝、薬理、精神等にわたる広範な研究成果を総覧し、疫学、代謝、飲酒行動の3つの項目にわけて整理し、その要約を文献とともに掲載した。本書が、アルコールと健康問題に興味を持たれている方の、アルコールを理解する一助となれば幸いである。